

→三の瀬川の溪谷と、愛に染まる紅葉の競演

2018. 11. 11 (日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 539 回 参加報告



東福寺、東司前

月下門をくぐってトイレ休憩。ひとしきりして再集合、禅堂、東司を見て回る。禅堂は一般の人でも日曜日の朝6時から座禅ができるとのこと。東司は「ご不浄」の意味、東に烏枢沙摩明王がおられるので「東司」、いわゆる便所のことだ。東福寺の東司はわが国最古、室町時代の遺構で使用できないが、曹洞宗永平寺の七間東司は使用できると説明があった。お喋りは不可、東司をつかうのも禅の修行だそうだ。

通常寺院の山門はここでは「三门」。「一切の姿かたちは空<空解脱門>」「比べるべきものなど何も無く<無相解脱門>」「何も無いものを望むことなど出来ない<無作解脱門>」の三解脱を心得て中へお入りなさいと、東福寺では「三门」が正式。浴室、十三重石塔の前を通過して、特別公開をしている龍吟庵へ。東福寺第3世住持・大明国師の住房であり、塔所でもあるそうだが、方丈の南と西と東の三方に、海中から黒雲に乗って龍が昇天する姿を現わす重森三玲



重森三玲作の庭園

作の庭園がある。そこへは、三の瀬川最上流部の「偃月橋(えんげつきょう)」を渡る。この橋も無料で、春屋妙葩(しゅんおく みょうは)が、本堂から開山堂へと、僧たちが溪谷を渡って行かねばならない不便を知って架けたという中流部の「通天橋」(有料)を渡ると、東福寺の三名橋はすべて渡ったことになる。

その龍吟庵の手前に即宗院がある。法性寺時代の月輪殿ゆかりの庭園や、裏山には西郷隆盛自筆の東征戦亡の碑も建つ塔頭である。この辺りが、藤原忠平の子孫で、法性寺関白とも呼ばれた藤原忠通(九条忠通)の時代になって最盛期を迎えたという法性寺伽藍の中心部であったようだ。昼食がてらにその九条家の墓の管理を行っている最勝金剛院も拝観し、これまで何度も来ている東福寺だが、初見の所ばかりを拝観でき充実した一日になった。

さて最後に、肝心の渡辺作品だが、「野分け」と「愛の流刑地」はいずれも不倫を扱った

小説で、京都が舞台になっている。二作のあらすじは配られたレジュメにもあるが、「野分け」は妻子ある男性を愛した女、「愛の流刑地」は夫ある身で他の男を愛した妻、と形は逆だが、ともにテーマは不倫である。講師は、しかしいずれも互いに罪悪感を背負っているところがいけないと仰る。悪い事とは知りながら…は駄目で、罪悪感を持つぐらいなら他人のものは取らないという覚悟がいるのではないか。それで



最勝金剛院

「人」は「人」を所有できるだろうか……と。〈所有〉ということについて考えるきっかけになった文学散歩だった。

解散後、私は、通天橋と開山堂など、そして方丈の拝観を日の暮れるまでゆっくりと楽しんだ。洗玉潤の溪谷美は素晴らしく、たっぷりと東福寺の紅葉に染まって帰路についた。

<報告：岩井よおこ>